

ハルピンの日本人教師



大門 弘
元山形県庁職員

【だいまん ひろし】1967年山形大学卒業、同年山形県庁に勤務、2003年定年退職、同年県庁図書館勤務、2007年退職、同年中国黒龍江大学日本語学科講師、2008年退職。短歌はかりん（馬場あき子主宰）、俳句は未来図（鍵和田柚子主宰）に所属。2009年5月短歌と俳句の「ハルピンの風」を出版。

1. 出発準備

(1) はじめに

私は二〇〇七年八月から一年間、中国ハルピンの黒龍江大学の日本語学科で教師をする機会を得ました。その前は三年ほど山形県職員として地方公務員を、退職後は団体職員として四年間点字図書館に勤務し、準備期間を経て中国に渡ったのでした。私にとっては海外生活は初めてですし、教師の経験もなく、中国語も話せません。ただ、中国には関心があり、旅行で何回か行き、楽しんでおりました。心の底では機会があれば実際の生活をしてみたいという好奇心はあったと思います。たまたま、息子が職場から中国語の習得と仕事で二年前に黒

龍江大学に派遣されていて、色々な関係で自分も行くことになったわけです。

(2) 準備

出発前にいろいろな手続きが必要でした。一つには中国で仕事をする上での就業ビザの申請です。これには大学からの招聘書の添付、細かい健康診断書の作成があり、これ以外に自分の意思で数回に分けて伝染病の免疫注射（風土病、A・B型肝炎、狂犬病等）そして病気や事故のための保険も必要で、入院すると日本の保険でないと経済的にも安心出来ませんし、又伝染病の予防は欠かせない要件です。これらは行ってみて実感として分かりました。狂犬病など、中国ではまだまだ予防衛生に対する認識が緩やかな

のです。

それから中国の大まかな社会、政治、経済、医療、生活などの特徴は理解していた方がトラブルを避ける上で良いと思います。日本のやり方だけでは対応できませんし、中国の現地に合った対応が求められます。法などはまだ未整備で、例えば有給休暇制度などはなく、必要な時は責任者と話し合っただけで済むという具合です。規則なども大ざっぱできちつと守られておらず、気にもしていない風です。日本人は細かく作って対応しますが、中国人は大まかで、少々不適合や不履行があっても気にしない所があります。中国ではいろいろな民族が同居しており、生活習慣も考え方も異なっており、中国人をすべて同一に考え



ハルビンの古い商店街の賑わい、
家鴨が二羽

ることは無理があるのだと思うようになりました。

(3) 中国の状況

中国の日本に対する考えは地域や年代によって違うと思いますが、息子は中国語ができ、職場に勤めていた関係で実情が分かり、中国人の日本人に対する意識はあまり良くないと言っていました。酒を飲むと日本の過去の行状を罵られることが多く、不愉快だと言っていたし、日本人に親近感を持たない非友好的な人も多いと見るべきでしょうか。今も、テレビでは抗日戦争が頻繁に放映されており、日本人がいかに残酷であるか、くり返し放映され、また、教科書などでも侵略の事はしっかり教えられています。ハルピンには日本の細菌部隊の遺跡が残っており、人体実験の人形や遺品が展示されており、学生の社会科見学の間となっています。しかし、反日感情を持つ人ですら日本人の勤勉さは十分認めていますし、日本製品は故障しないと高い評価をする人が多いようです。

一方、多くの中国人は自国の経済発展を高く評価していますが、同時に高度成長で失われたものも認めており、誠実さ・信用・正直・責任感がなくなった事を嘆き、政治腐敗・環境問題・収入格差の拡大が社会に深刻な影響を与えていると感じています。それでも拝金主義の

勢いは強いものがあります。

一般論はこの辺で止めて、私のことは趣味として短歌と俳句を作っており、中国でも、拙いながら継続して歌っていたいと思っています。

- ・大陸で一人で生きる子を思う中秋の月 仰ぎておらん
- ・虚しさの日常抜けて秋雲のハルピンへの道今駆け出さん
- ・子へ送る封書膨らむ初夏の風
- ・子が発てば部屋寒々と古時計

2. 秋

(1) ハルピン到着

八月下旬、新潟から直行便で二時間四十分でハルピンに着きました。緯度は日本の稚内ぐらいで、風景はがらりと変わります。大学の関係者と息子が出迎えてくれて、車で大学の宿舎へ直行です。部屋は二部屋と台所とバストイレ付きできれいな造りで、電気、水道、部屋代は無料でした。宿舎は大学構内にあつて、買物に行くにも便利な所でした。

ハルピンの呼び名はハルピンとも言い、どちらも使われていますが戦前はハルピンで、最近はハルビンでも通用します。人口四五〇万の巨大都市で黒龍江省の文化、産業、政治の中心で省でもあります。毎年急激な都市化と開発が進み、

車、煤煙、汚水に晒されていて、決して綺麗な街とは言えませんが、元々はロシア人が造った町で、パリのような石造りの建物と石畳のある西洋風な中央大街や水の豊かな大河松花江、そして兩岸の公園は榆と柳の大樹が青々と繁り、夕日が川面に照り返して暮れてゆく様子は市民の憩いの場としても魅力のあるところです。戦前は日本人も三万四千人以上住んでいて、今でもその時の小学校、大きな書店、デパート、鉄橋などが現役のまま使われていて、どこか日本人には親しみのある所なのです。

(2) 黒龍江大学

この大学は学生、教職員の数は三万人を超えている総合大学で、元々はロシア語から始まった大学で、日本語学科も古いとの事。学生は全寮制で四人部屋、六人部屋で生活し、一人つ子政策で育った学生にとっては窮屈な感じもします。が、青年期の多感な時期に寮生活を通して、多様な人達と付き合うことは良い事だと思えます。一学年は三組で一組二八人前後。中国の学生は良く勉強します。卒業後には厳しい就職難が待っており、それに打ち勝たねばならず、親の期待にも応える必要があり大変です。日本語学科の学生は大学で初めて日本語と出会い、その難しさに苦労しますが、持ち前の粘りと優秀さで乗り越えて行きま



冬の松花江の水河
(鉄橋は旧満鉄時代のもの)



黒龍江大学正面

す。学生は質素で素直な人が多いと思います。

私は二、三、四年生と院生一年を担当しました。新学期は九月からで、新入生も加わり構内は活気がある時期です。特に語学科の学生は朝早く毎日、校庭のあちらこちらで大きな声で発声練習をしています。また、新入生は単位として男女とも軍事教練が朝早くから夜まで構内の各広場で練り広げられます。一週間もすると、きびきびした分列行進が出来るようになっていきます。

(3) 大学周辺

大学周辺を歩く時、大路を渡ることでも右折車、左折車は入って来て、人が優先ではありません。赤でも人は渡りますし、警察官が居ても注意はしません。自己責任なのです。信号のない大路を渡るのには勇気が必要で、車は止まってくれず、慌てず車をやり過ごして、左右を見て渡るのです。

それから珍しいことでは毎朝、町単位で朝市が所定の場所で開かれ、近郊の農家から野菜などが運ばれ、スーパーより安く新鮮に売られていることです。それ以外は肉、魚、焼パン、雑貨となんでもあり、沢山の人が一日の食材を求めて集まります。夜は夜で大学の横通りで夜店が出て、学生達も気分転換に楽しんで

ています。涼しい夜風に吹かれながら見て歩く事は楽しく、懐かしい気持ちになります。

- ・ ハルピンのかつての日本の小学校どこか懐かし手で触れて見る
- ・ 石畳に大きな筆で水の墨書く老人に夕日が映える
- ・ 黍畑遙か連なる大地なり大夕焼けが音なく沈む
- ・ 向日葵の種を吐きつつ小物売り
- ・ 太極拳幼児も秋の風を押す

3. 冬

(1) 零下二五度の日々

ハルピンの秋は短かく直ぐ冬に飲み込まれる感じがします。一〇月下旬には冷たい大陸の風が吹きます。大学の暖房は全館スチームですが直ぐに入るわけではなく、それまでは落ち着きませんし、各部屋で調整は出来ません。一旦入ると二四時間体制でもとても快適です。しかし使われない教室もすべて暖房が入っており、日本人の感覚ではもったいないと思ってしまう。

部屋の温かさに比べ、外気は零下二〇度を越えているので、外出時はその都度しっかりと身支度をしなければいけません。時には零下三〇度近くになり、寒いだけでなく顔も痛くなります。ハルピ

ンは雪は少ないのですが、降らないわけではなく、それでも車は夏タイヤで過ごします。乾燥しているので氷が日本に比較して滑らないのですが、氷は氷ですので危険で事故は多くなります。

(2) 氷祭

ハルピンの冬の風物詩として定着しており、中心は松花江の広大な川原で行なわれ、時期は一二月中旬から二月下旬頃まで、氷は松花江の無尽蔵にある氷を切り出して、建物などの造形物を作ります。あとは色彩豊かなライトを当てて、華やかにして楽しむもので、札幌の雪祭と似ていますが規模はハルピンの方が大きいように見受けられました。美しいのですが夜なので体の芯まで冷え込み、零下三〇度ともなると、落ち着きません。早く帰ってお風呂に入り温まりたい気持ちです。

(3) 春節

中国人にとって一年間の中で一番大切に楽しみな行事は春節で、日本のお正月に当たります。時期は一月下旬から二月中旬ぐらいの期間で、年によって違います。休暇は七日から十日ぐらいで、故郷から出て来た人には家族や一族との絆を深める為、万難を排しても故郷に戻ります。駅などの交通機関はごったがえしとなり、異様な雰囲気になります。



朝口バで仕事に出かける
(黒龍江大学南側通り)

切符の確保やぎゅうぎゅう詰めの乗車の長旅は大変なのですが、それでも学生達も帰郷を楽しみにしており、いろいろな苦しい事も、この春節があるから耐えられるのです。爆竹を鳴らし、食べ、飲み、心を発散し家族と楽しめます。

大学は急に人影がなく、寂しくなり、同時に学校は春休みとなり外国人教師も三月始めまで休みで、母国へ帰国する人が多いのです。ただ、この春節直前の時期は窃盗などの犯罪も多くなり、大学周辺でも事件が起きるたび掲示板に注意が告げられます。

- ・ 帰り来て疲れて風呂に入る夜足を伸ばせばしみじみ一人
- ・ ハルピンは太古もかくや寒風が荒びて吹くや校舎広場も
- ・ 大氷柱四階ビルから垂れ下がりその先もう直ぐ地上へ届く
- ・ 吐く息の長さで寒さ計る朝
- ・ 散髪の零下二十度すがすがし

4. 春

(1) 散歩の日々

日常の運動不足を補うため、万歩計をつけ日々一万歩以上を歩くよう心がけました。

とりわけハルピンの春は寒さからの解放を意味し、四月中旬から下旬までに樹木は一斉に芽吹き季節となります。五

月構内は柳の大樹が風に揺れ、ライラックが咲き乱れ、ポプラの葉音がカサカサと音をたて、朝などはじつとしておれません。五月晴れの冷んやりした静かな構内の散歩は楽しく、隣の医科大学、それも飽きると周辺の町並、胡同街などにも入り込みました。土曜、日曜などは地図を片手にバスに乗り、あちらこちらを散策しました。そのことが今もハルピンへの愛着に通じているのでしょうか。学生とも良く散歩をしました。日本の事、学生の故郷の事、将来の事などは尽きません。学生との会話は日本語のレッスンにもなるのだと思ひ、可能な限り楽しく付き合いました。

(2) 小旅行

生活にも慣れて爽やかな春の訪れは旅を誘います。まず同僚の先生とガイド役の学生とハルピン郊外阿城と言う所のかつての金王国の遺跡と博物館を見学しました。今は長閑な農村なのですが城壁の土塁は残っており、また王の墳墓一つがあり、ひやりとした地下の柩などを見ました。博物館はとても大きな建物で金王朝の輝かしい展示物で溢れていて、巨大王国の遺影に圧倒されました。

次は三泊四日でロシア国境の町綏芬河と牡丹江へ列車で行き、綏芬河は夜行で七時間かかりました。ロシアとの貿易で栄えている町で、明るくロシア風で異

国情緒ある町として注目されています。それから牡丹江です。戦前の日本人には馴染みの深い町で満州開拓の拠点でもあり、ソ連参戦でさまざまな開拓の悲劇のあった所でもあります。

もう一つは西の草原チチハルに、一泊二日で行きました。鶴の生息地や野鳥の保護区で有名です。草原湿地帯でも町は砂塵が舞い、風の強い所でした。大陸は広いとつくづく感じた旅行でした。

(3) 病気

海外生活で入院を伴う病気になる事は大変なことです。レベルの高い通訳が必要となり、中国の医療保険は受けられないし、事前に医療経費用意しないと診察してもらえず、外国人にはその医療費が適正かどうかの判断も出来なく、医療技術や器具類が完備されているかも不明で、患者の給食制度がないなど問題が多くあります。

ある日本人教師が脳梗塞で倒れ、手術を要する事となりましたが、医療技術



スターリン公園、筆で道に字を書いている



夏の松花江の大河

上、現地では無理と言われ、安静が必須で、直ぐに日本には運ばず、安定するまで入院し、その間の食事三食は学生が当番を決めて運び、その後日本で手術をしたと聞きました。また、同じく日本人教師が中国の生活に馴染めず、不眠症にかかり鬱となり、授業に支障をきたすほどになりましたが、中国ではまだ鬱病に対する理解と医療対応はなく、通訳の事もあり、治療は出来ず帰国せざるを得ませんでした。その他衛生上の食中毒の事もあり、たえず注意が必要です。

- ・ 五月雨にすだまが眠る牡丹江河とうとうとすべて流せり
- ・ それぞれが火種を持って生きている耐えているもの弾ける日あり
- ・ 世の多く自力で生きる外はなし諸君も私も雑草なのだ
- ・ 緑陰に木椅子一つの散髪屋
- ・ 風若葉読経の籠もる道教寺

5. 夏

(1) 学期末

黒龍江大学の学期末は七月末で、卒業式は七月上旬です。四年生は一月以降は授業もなく卒業論文だけが残り、日本語学科の卒論は言語、文学、日本文化の中から自分の関心のあるものを選び、八千字〜一万字ぐらいでまとめます。私

の担当は日本文化の九名で、日本の社会福祉、日本の結婚式、武士道、日本人の視線等々の卒論があり、最後は冊子にして先生方の評価を得るのです。三年生は作文で、毎回宿題に文章を書かせ、作文試験では「自分の将来」と言う題名で書いて貰いました。二年生は後半、毎回スピーチをさせ、質問し、最後に締めくくりのスピーチ試験をしました。院生には短形詩を教えました。

(2) 学生の就職

日本の輸出先は中国が今や米国を抜いて第一位で、進出企業も毎年増加の一途をたどっており、その分各大学の日本語学科の学生数も急増して、就職は厳しいのです。就職の決まった学生は三月頃から大連や上海の日本関連企業などに職場実習に行き、初めて会社の日本人の指導を受けます。帰って来て言うには、日本人の上司は必要以上に細かく疲れる、大らかさが無い、日本のやり方だけを強要する、物事がいまいだなどとは不満を述べています。仕事の進め方やリーダーのあり方も中国人の思考とどこか違うのでしょうか。意思のあやふやな稟議的思考や集団主義が理解できないのかも知れません。優秀なS君は上海の日本企業に決まっていたのですが、辞めて給料の低い国営企業を選びました。日本企業では息苦しく、幸せ感を持ってないと

言う事でした。

企業進出が増加する中、中国人の気質や実情の理解に努め、出来るだけ協力的、合理的な視点で人材を求め、活用しなければ、他国との競争に負けてしまうのではないかと思います。

(3) 帰国

教師寮の単身生活は、やはり寂しい面もありましたが、段々、学生にも慣れてくると若者の息吹も肌伝わって来て、第二の青春に触れたような、とても貴重で有意義な日々を過ごせたものと思っています。また、中国は多様で複雑な顔を持った国であることも次第に分かってきます。無事に帰国して、短歌と俳句の整理をしてみても、今更ながら、ハルピンからは沢山の恩恵を受けたのだと感謝しております。

- ・ 青春の微熱を抱え君ら去る柳絮飛び交う卒業近し
- ・ 中国は矛盾が深く沈殿し何でも飲み込み何でも起きる
- ・ 来た道を語るに少し酒が良いあれば滑らか恥多いゆえ
- ・ 卒業期みな甘そうに西瓜食む
- ・ 汗拭いて言わねばならぬ嫌なこと
- ・ 夏来ても覚えきれない学徒の名
- ・ 目閉じれば榆の涼しきハルピン街